**構成吟「神奈川を詠う」**

**❘漢詩と共に旅をしましょう❘**

明治の文豪 夏目漱石の「函山雑詠」で箱根を出発。湘南は２０２０年全国漢詩大会で文部科学大臣賞を受賞した故 城田六郎の「酒匂川の畔の村酒」、江の島は江戸時代の漢詩人 菅茶山の「絵島」。その他「湘南海岸に箱根駅伝とサーフィンを見る」「頼朝故宮」「鶴陵廟偶成」「葉山海岸に岳を望む」「横浜」と、漢詩と共に横浜まで旅をしてまいります。

**漢詩一覧**

**箱 根**

1. 函山雑詠　八首其二　　　　　　　夏目漱石　五言律詩　２

**湘 南**

**二．**湘南海岸見箱根駅伝与滑瀾　岡崎満義　七言絶句　３

　三．　酒匂川畔村酒　　　　　　　　　　城田六郎　七言絶句　４

**江の島**

1. 絵 島　　　　　　　　　　　　　 菅 茶山　　七言絶句　５

**鎌 倉**

1. 頼朝故宮　　　　　　　　　　　　太宰春台　七言絶句　６
2. 鶴陵廟偶成　　　　　　　　　　　秋吉邦雄　七言絶句　７

**葉 山**

1. 葉山海岸望岳　　　　　　　　　　鈴木豹軒　七言絶句　８

**横 浜**

1. 横 浜　　　　　　　　　　　　　 嵩 古香　　七言絶句　９

注）白文の字体は、出典図書に従っており、旧字には必ずしもこだわっておりません。

**一．函山雑詠　八首其二**函山雑詠　八首其の二　夏目漱石

函嶺勢崢嶸　　函嶺たり

登来廿里程　　登り来たる廿里の程

雲従鞋底湧　　雲はより湧き

路自帽頭生　　路はより生ず

孤駅空辺起　　孤駅 空辺に起こり

廃関天際横　　廃関 天際に横たはる

停筇時一顧　　を停めて　時に一顧すれば

蒼靄隔田城　　 を隔つ

出典　石川忠久著「東海の風雅」

**作者**

夏目漱石（一八六七～一九一六） 東京の人。明治の文豪。

**語釈**

○函嶺…箱根の山。○崢嶸…険しくそそり立つ。○天際…空のはて。

○田城…小田原の街。

**通釈**

箱根の山は険しくそそり立つ、二十里のを登って来た。雲がから湧き、路は帽子の上から出てくる。山の駅がポツンと立ち、昔の関所が空のはてに横たわっている。を休めて振り返れば、いの向こうは小田原のだ。

**解説**

漱石二十四歳の作。東京大学で正岡子規と親しくなり、漢詩の応酬が始まりました。この詩も漱石から子規へ寄せられたものです。山の険しさの表現について二人のやり取りが残されています。

**二．湘南海岸見箱根駅伝与滑瀾**　 　岡崎満義

　　　　湘南海岸に箱根駅伝とを見る

雪峰映海此迎新　　雪峰　海に映じ　此に新を迎える

走路人兼滑瀾人　　路を走る人とを滑る人と

世上躁狂都似夢　　世上の躁狂　て夢のし

乗風奔放楽青春　　風に乗り奔放　青春を楽しまん

出典　岡崎満義著「平成の漢詩あそび」

**作者**

岡崎満義　神奈川県漢詩連盟元会長

**語釈**

○雪峰…冠雪の富士山のこと。○滑瀾人…サーファーのこと。

○躁狂…うかれ、くるうさま。うるさいこと。

○奔放…ものにとらわれないさま。思うがまま。

**通釈**

冠雪の富士山の姿が相模の海に映り、このようにして新年を迎える。それは箱根駅伝のランナーも同じだし、サーフィンを楽しんでいる若者も同じである。世の中のうかれ狂うさまはまるで夢のようである。サ―ファーよ、風に乗って思うがままに青春を楽しんでくれたまえ。

**解説**

正月恒例のスポーツといえば、今年１００回を迎えた箱根駅伝があります。湘南の地に住む岡崎満義氏による本詩は、箱根駅伝のランナーが駆け抜けていくその近くの海でサーファーが波乗りを愉しんでいる風景、これこそが湘南の正月だと詠います。

**三．酒匂川畔村酒**　　　の畔の村酒　　　　城田六郎

嶽麓發源淸冽川　　にを発す清冽の川

麴塵粳稻僻村傳　　僻村に伝う

綠醅初熟醍醐味　　初めて熟しの味

一斗十千何惜錢　　一斗十千ぞを惜しまんや

**作者**

故城田六郎　神奈川県漢詩連盟元会員

**語釈**

○酒匂川…小田原のすぐ東を流れる川。○岳麓…富士山の裾野を指す。

○清冽…水が澄んで冷たいさま。○麹塵…こうじの菌。○粳稲…うるち米。

○僻村…いなかの村。○緑醅…緑色の美酒。○醍醐味…美酒のたとえ。

○一斗十千…漢詩でよく用いられる高い酒を表す表現。

**解説**

小田原のすぐ東には酒匂川が流れており、かつては氾濫を繰り返し農民を苦しめましたが、今は穏やかな川となりました。酒匂川の河畔には優れた酒造元があり、新酒の時期に訪れた作者の故城田六郎氏が酒匂川の水の清らかさと酒の味の素晴らしさに魅了され詠んだ七言絶句です。本詩は第二十五回国民文化祭・みやざき　２０２０全国漢詩の祭典で最高賞である文部科学大臣賞を受賞しています。

**四．絵 島**　　　　　　　　絵の島　　　　　菅　茶山

山陽諸島列成隣　　山陽の諸島 列してを成す

佳境各堪誇北人　　佳境おの 北人に誇るにへたり

一事唯難及斯地　　一事だ の地に及びし

芙蓉隔海露全身　　 海を隔てて全身をはす

出典　石川忠久著「東海の風雅」

**作 者**

菅茶山（一七四八―一八二七）　備後（広島県福山市）の人。

十九歳で京都へ出て学問を積み、三十四歳で郷里の神辺に塾を開き、その後塾

は福山藩の郷塾となり、本人は潘の儒官に取り立てられた。藩主の命で、二度

江戸へ出て、幕府の儒官や詩人らと交わりを結んだ。江戸時代の漢詩人として

著名。

**語 釈**

○絵島…江の島。芙蓉…富士山のこと。

**通 釈**

山陽のの島々は隣り合って並び、その好景はそれぞれ、北の方の人に自慢する。だが、ただ一つ、及ばないものがある。それは、美しい富士山が海の向こうに全身を現わしている景色である。

**解 説**

今から１９０年ほど前、片瀬海岸に立った作者が目の前の江の島と海の向こうの富士山に心を打たれ詠んだ漢詩です。茶山の郷里、瀬戸内海の景色を自慢しつつも、富士の姿にはどうしても及ばないと詠んでいます。芙蓉とは蓮の花のこと、雪をかぶる富士山を蓮の花びらに見立てています。

**五．頼朝故宮**頼朝故宮　　　　太宰春台

独騎鷹揚定大東　　独騎 として大東を定む

千秋覇業壮関中　　千秋の覇業関中に壮たり

繁華銷尽青山下　　繁華 え尽す青山の下

禾黍離離戦晩風　　離々として晩風にぐ

**作 者**

太宰春台（一六八〇―一七四七）　信濃飯田の人。江戸中期の儒学者。

三十二歳で荻生徂徠に入門。経書経済に通じ、詩文の服部南郭、経義の春台と並び称された。

**語 釈**

○故宮…もとの宮殿。○大東…日本のこと。○千秋…千年。長い年月。

○覇業…天下統一の事業。○禾黍離離…稲やきびがよく実っているさま。

**通 釈**

独りの武人が飛揚する鷹のように悠然とこの国を平定し、長い年月の間天下統一し関東にあって盛んであった。今は昔の繁華も消えて青山の麓は田畑となり、いねやきびがたわわに実って夕風にそよいでいる。

**解 説**

源頼朝は八幡宮を鎌倉の中心とし、若宮大路をはじめとする道路や町づくりを行い、本宮を造営して若宮と分離し、征夷大将軍や頼家・実朝などの叙位任官の際には、本来ならば京都の内裏で行われるべき拝賀の儀式のすべてを鶴岡八幡宮で済ませています。このことも、鎌倉が頼朝故宮と言われる所以の一つかもしれません。神漢連叢書として発刊した「歩こう神奈川　漢詩八十景」に採録しています。

**六．鶴陵廟偶成**　　　　　　鶴陵廟偶成　　　　秋吉邦雄

亭亭朱廟屹靑天　 亭々たる朱廟　青天にち

鬱鬱綠雲纍紫烟　 鬱々たる緑雲　紫煙をう

磴上偏憐小靈樹　 磴上えにれむ　小霊樹

蘖栽期得又千年　 期し得たり　又た千年

**作 者**

故秋吉邦雄　神奈川県漢詩連盟元会員

**語 釈**

○鶴陵廟…鶴岡八幡宮○鬱鬱…樹木のこんもりと茂るさま。

○蘖…ひこばえ。枯れた樹木や切り倒されたりした樹木の切り株から出る新芽。

**通 釈**

朱色に階を連ねる社殿が、青色の空へとそびえ立っている。緑色のこんもり茂る木々が紫色の霧を身に纏っている。石段の上の小さな霊木に、ひたすら胸を打たれる。そこから若芽が伸び、さらに千年の生命を得たのだ。

**解 説**

鶴陵廟とは鶴岡八幡宮のことで、平成２２年突然倒れた大銀杏を詠っています。蘖とは切り株から出た芽、ひこばえのことです。本詩は、平成二十八年度　全日本漢詩大会京都大会で特別賞を受賞しています。審査委員長の石川忠久先生は「晴天につ鶴ケ岡八幡宮の昔に変わらぬ威容と、銀杏のひこばえとを対比させ、このひこばえもやがては千年の老樹となる、と結び、八幡宮にこもる歴史の永遠を詠う。き深い作だ。」と評されています。

**七．葉山海岸望岳**　　 葉山海岸より岳を望む　　 鈴木豹軒

雪岳半肩蒼靄間　　雪岳半肩 の間

海天如拭碧波閒　　海天ふが如く碧波なり

秀容千古終無改　　秀容千古にまる無し

真是乾坤第一山　　真に是れ 第一の山

出典　石川忠久著「東海の風雅」

**作 者**

鈴木豹軒（一八七八―一九六三） 新潟の人。

東京へ出て、旧制一高を経て、東大の漢学科を卒業した。同級に宇野哲人がいる。明治の末、京都大学が設立されると、漢詩文担当の教授となる。京大の同僚には、内藤湖南、幸田露伴らがいて、共に京都の中国学の礎を築いた。

**語 釈**

○岳…富士山を指す。○閒…閑。○乾坤…「易経」の語。「天地」をいう。

**通 釈**

雪を半分かぶったお山が、い霞の中に立つ。海も空も拭ったように青く、波も静か。秀でた姿は永遠に改まることはない。本当にこのお山は、天下第一だ。

**解 説**

富士山の眺めが素晴らしい葉山の海岸風景を詠じています。誰もが抱く富士山への思いを素直に詠ったもので「乾坤第一の山」とはこれ以上ない形容です。

**八．横 浜**　　　　　　　　横 浜

隔海孤洲別作郷　　海をつるにとる

満街奇貨各豪商　　に満つる奇貨おの豪商

誰知繍戸瓊楼地　　誰か知らん の地

旧是漁郎晒網場　　と是れの網をらすの場なるを

出典　石川忠久著「東海の風雅」

**作 者**

嵩古香(一八三七―一九一九)

埼玉県松山市にある真言宗大谷派の寺の住職。しばしば江戸へ出て詩人たちとも交流し、約一万首の詩を残している。

**語 釈**

○隔海孤洲…横浜の立地条件が、大岡川によって東海道筋から分けられ、あたかも長崎の出島のように孤立していたことによる。

**通 釈**

海を隔てて一つの島が別天地となっている。街にれる珍しい品物を売るのは、それぞれ豪商たちの店。美しい高どのやが立ち並んでいる土地は、もとは漁師の網を干す場所だったとは、誰が知ろう。

**解 説**

文明開化と共に横浜の夜明けが始まりました。漁師の寒村に過ぎなかった土地に妓楼や洋館が林立する変わりようを詠います。開港わずか１年半ですでに繁華な街に変貌していたことを証する資料となる詩です。